

「子どもたちが世界を救う」

2019.2.5 遠藤清賢

子育ての社会化が進んでいます。一つの理由として母親の負担が大きくなり、母親が孤独の中で子どもを育てている社会になっているために、社会全体で子どもを育てようということだと思えます。子どもを育てる様々な方法が拡散されています。それぞれの子によってその方法は異なると思いますが、個々の子どもに合った方法を探し求めることが子育てなのだと思えます。本来、私たちにあって子どもを育て、その成長を確認することは、大きな喜びであり、生きるための力であり、希望をもたらす働きです。子育ては子どもを慈しみ、愛することであり、子どもと共に生活し生きることは、私たちの心に安らぎと幸福感をもたらすことが出来るのです。子どもとの関わりは、人間にとって「愛する」とはがいかなる行為であるかを思い出させ、確認させてくれる働きでもあるのですが、今の日本は子どもを育てることは「愛する」ということではなく「忍耐する」と言うことを意識させる行為になっているようです。子どもと一緒にいることは、安らぎ、希望、楽しさ、生きがい、他者のために生きている、と言うようなことを実体験することが出来ます。同時に、自分以外の命を支えることの不安や心配、迷い、そして、悲しみというような思いも経験し、これらを乗り越えた時に、また乗り越えることが出来なくても子どもが成長し、独り立ちした時点で、最終的には、生きることの大きな喜びと幸福感を私たちに与えてくれるのです。しかし、現代の私たちは肉体的な労働や精神的な痛みに脆弱になっているのではないのでしょうか。そして時間の経過を待つことも苦手になって来ているように感じます。すぐに結果を確認したいというのが今の私達です。普段の生活があまりにも便利になり簡単に身の回りの環境が整備でき、娯楽を簡単に手に入れることの出来る社会になり、忍耐や、肉体的な苦勞に対し、苦痛を感じてしまう人間になっているのかもしれませんが。子どもを育てること、そして愛するという行動は実際に体を動かさなければなりません、そして忍耐しなければできないことが多くあるのです。しかし、その結果は決して自分が意図したとおりになるとは限らないのです。正直どうなるのかはわかりません。ただし、愛情をかけて育てたことは決して誰をも裏切ることはないとは私は信じています。

聖書では愛とは、忍耐強い、情け深い、自慢しない、高ぶらない、礼を失しない、利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない、不義を喜ばない、真実を喜ぶ、全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てを耐える。と書かれています。これを読むと愛するという行為は忍耐強くあるべきということが書かれています。愛するということは忍耐強いことであると思ってしまうます。愛する行為は第三者から見れば我慢するとか、情け深く、謙虚な行動のように見えます。

しかし、実際、愛する行為を行っている人はそのような事は意識していません。当然のこととして、自然の行為として、その行為を行うことに大きな喜びを持っているのです。愛するということは、愛する者のために生きたいという思いであり、愛する者の為に自分の命を捧げたいという行動なのです。しかし、他者から見れば心を制御し、忍耐をもって行っているのが愛の行動のように見えます。子どもを育てることに於いて、母親は忍耐をもって子どもたちと関わっているように見えます。しかし、子どもを心から愛し、子育てを喜び、楽しんでいる人には、忍耐するとか、苦痛に感じることは全くないのです。全てが自然であり、喜びであり、楽しみとなっているのです。しかし、このような子育てができる人は非常に少ないのかもしれませんが。私自身、子どもが誕生し、独り立ちするまでは試行錯誤の状態をどうしたら良いのか迷い、戸惑いの連続でした。良い子育てができたとは全く言えない駄目な父親だと思っています。今考えれば、あの時このようにしてあげれば良かったのに、と言うことばかりです。全てを捨てて投げ出してしまいたいと思ったことが何度もありました。しかし、どんなに大変な時でも、どうすれば子どもにとって良いのかを妻と一緒に懸命に考え、対応して来たつもりです。今はそれぞれ独り立ちして家族を持ち生活しています。今は当時の苦労がとても懐かしく思い出されます。実際に大半の親御さんたちは、大変な思いをしながら子どもたちを懸命に育てているのが現実なのです。

今の日本は親、特に母親にだけ過剰な負担がある社会になってしまいました。子どもがいることによって、現代人には安らぎや心地よさ、未来への希望を感じさせない精神状況を造り出しているのが今の社会です。自分たち家族の生活環境を維持する為に母親も働かざるを得ない社会になっています。そのために、家族が変わって子どもを育てる保育園に子どもたちが集まってきます。保育園で子どもたちの生活を支えることはできますが、親御さんたちが親としても大切な過程を直接体験できなくなってしまうのは残念なことです。子育ての体験は真実の「愛する」という精神を育ててくれる体験だと私は思っています。特に幼い時に子どもを育てることによって得られる体験は貴重な事です。この体験ができないことによって親御さんたちは、自分の子どもに対しての愛する心に不安を感じてしまうことがあるのではないのでしょうか。保育園を利用する場合は、出来るだけ子どもと一緒にいる時間を大切にしたいと思います。

私たちの保育園周辺地域では子どもの姿が見えることを喜んでいただいています。保育園の行事に沢山の地域の皆さんが参加して下さっています。地域の人たちと保育園の子どもたちの交流を喜んで頂くことが出来ます。しかし、都会では子どもの声が騒音に聞こえる人が多くなってしまっています。自分が住んでいる場所に保育園が出来ることを反対する人たちが多く存在し、保育園建築に対し反対運動が起きている社会になってしまっています。子どもたちの声が聞こえるのは自然な環境であったはずですが、その声

が騒音に聞こえるほど、人の心は荒んでしまっています。

人間の精神はどこか壊れかかっています。自分の以外のものはすべて受け入れられない人たちが多く存在しているのです。自分の生活環境に関係の無い物、有効でないものは全てを排除することが当たり前のようになっている社会環境に変化しているのです。愛することは我慢することだと感じる。愛することを自己犠牲のように感じているのが今の私たちではないでしょうか。弱い人たちを助けようとする心、苦しんでいる人たちを支えようとする心が失われてしまったのはどうしてなのでしょう。そして、わが子でも少しでも自分の意に沿わない時は叱りつけ、虐待し、生きることを許さない社会になってしまいました。子どもたちのそのままの姿を受け入れることができない社会になっています。そして、肉体的、精神的な痛みに対して弱い人たちが多くなってしまいました。健康に対して非常に敏感で、少しでも命を長く保つことが人生の最大の使命のようになっている社会です。

自分の人生は、自分の命は自分の思いのままに生きるのが自由な社会であるというのが正しいとされています。そうなのかもしれませんが、しかし、自由であってもこの星で生き続けるためには、人間として守らなければならない掟があるのです。私たちが守らなければならない生き方は、命を殺さない、命を大切にす、命を守るということです。この世界の中に自分自身は守られていて、生かされているという謙虚さを持つことが大切な事です。命を守り大切にすることは子どもたちの成長を支えることです。子どもたちとの生活を、一緒に喜び、楽しむ、ことなのですが、私たちは自分の命は非常に大切にしているのですが、中には自分の命さえも大切に出来ない人たちも増えているように感じています。命そのものを大切に出来る心が失われてしまった社会に生きているのです。

人間は未だに、国家とか民族等の意識から抜け出すことが出来ていません。人間としての存在を理解しているようですが、国とか人種とか民族等の境界が私たちの意識の中に明確に存在しています。お互いに協力し、支え合っている時はいいのですが、過去の歴史に囚われ、それを許し合うことが出来ないのが私たち人間です。未だに、敵とみなしている国に対して兵器を作り、抑止力として大量殺戮破壊兵器を増強しています。国家間でこれらの兵器を見せつけ、殺人能力の高さを競い合っているのが、愚かな私たちなのです。人間は増え、この星で人間が生きることの出来る環境を人間自らの手によって破壊し、気候変動を誘発し、生物の命を維持できないくらい水を汚染しているのです。このような状況に於いて「愛する」ことは何も意味をなしていないのです。宗教は人間の都合に合わせて変えられ、真実の神は、力の強い者が神のような存在になってしまいました。古代から人間が推考し真理を探究してきた伝統的な宗教は廃れ、人間は自

らを神のような存在にアップグレードしようとしています。子どもの命を守るとか、命を支えるということを言いながら、命を抹殺する兵器を開発し、環境を破壊し続けているのが私たち人間です。人間は自らの愚かさを自覚していません。

しかし、本来あるべき人間としての姿を取り戻すためには、「愛する」という心をそれぞれが取り戻さなければなりません。「愛する」ことのあるべき姿は子どもを育てる過程の中で生まれ、気付かされるのです。子どもたちと一緒に生きることによって、喜び、楽しみ、時には悲しみを共有することによって、真実の「愛」を私たちは体験し、自分の生きる力にすることが出来るのです。少子化で子どもがいなくなるということの最大の問題点は人間が長い間育ててきた人間が人間としてあるべき大切な精神である「愛」する心を育むことが出来なくなることです。「愛」を失ってしまった人間が多くなり、争い、戦争等、殺伐とした環境になってしまう危険性があるのです。世界の人々を救うのは「愛」であることは明白です。神様が私たちに教えてくれた「愛」する心を「愛」する行動を思い出したときに私たちの世界は命の楽園に変化するのです。その「愛」を育ててくれるのは私たちの子どもたちであることを私たちは思い出さなければなりません。